

リーナ・グローヴ

——『八月の光』についての考察——

井 上 勝

'I have come from Alabama: a fur piece.
All the way from Alabama a-walking. A fur piece'——Lena

'My, my. A body does get around. Here we aint been coming from
Alabama but two months, and now it's already Tennessee.'——Lena

I

『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*, 1929) の終り近くに次のような個所がある。

"*I've seed de first en de last,*" Dilsey said. "Never you mind me."

"First en last whut?" Frony said.

"Never you mind," Dilsey said. "*I seed de beginnin, en now I sees de endin.*"⁽¹⁾ (イタリックは筆者)

「わたしゃはじめとしめえばみてきただ」とディルシーは言った。「気にしなくてもええ。」

「はじめとしめえ、なんだね」とフローニーが言った。

「気にすんなくて」とディルシーが言った。「わたしゃはじまるのぼみたし、でいま、おわるのをみてるよ。」

Dilsey went out. She closed the door and returned to the kitchen. The stove was almost cold. While she stood there *the clock above the cupboard struck ten times. "One oclock," she said aloud, "Jason aint comin home. Ise seed de first en de last," she said, looking at the cold stove, "I seed de first en de last."*⁽²⁾ (イタリックは筆者)

ディルシーは出て行った。彼女はドアを閉めて、台所へ戻った。ストーヴはほとんど冷たくなっていた。彼女がそこに立っていると、食器棚の上の時計が10回鳴った。「1時」と彼女は声に出して言った、「ジェイソンは家へかえってこねえだな。わたしゃはじめとしめえぼみてきた」と彼女は冷たいストーヴを見やりながら言った、「わたしゃはじめとしめえぼみた。」

最初の引用は、1928年の復活祭の4月8日に教会でシェゴグ師 (Rev'un Shegog) の最後の審判についての説教を聞いてのち、ディルシーたちが町中へ出たときの場面の部分である。次の引用は、同じ日家へ帰ってきたディルシーが台所にいる場面の部分である。ディルシーは「わたしゃはじめとしめえぼみてきただ」と言い、「わたしゃはじまるのぼみたし、でいま、おわるのをみてるよ」と言っている。それならば、彼女は何の初めを、あるいは始まりを見、何の終りを、あるいは終るのを見たのだろうか。

ディルシーが「わたしゃはじめとしめえぼみてきただ」と言ったとき、娘のフローニーは「はじめとしめえ、なんだね」ときき返している。それに対し、ディルシーは「気にすんなって」と言うだけで何も答えてはいない。そのために、ディルシーが見たのは何の初めであり、終りであるのか、フローニーにはわからない。同様に、ぼくら読者にとってもそれは謎のままである。作者はそれ以上のことは書いていないからである。

しかし、『響きと怒り』が旧家コンプソン家 (the Compsons) の一人娘キャディー (Caddy) の倫落を軸にして、四部から成り、最初の三部は彼女の兄や弟たちの内的独白により、最後の第四部は全知的視点によって、キャディーの実体を捉

えようとしている物語であることを考えれば、ディルシーの見たものとは次のようなものであると推測することができるだろう。すなわち、ディルシーがその初めと終りを見たものとは、「一人の少女」キャディーがやがて「成熟した女」へと変貌し、そのためにいわゆる道徳的に墮落していった過程の初めと終りということであろうし、さらにはキャディーの倫落を契機として加速された旧家コンプソン家の崩壊の過程の初めと終りということになるだろう。なぜならば、ディルシーは黒人女中としてずっとコンプソン家に仕えてきており、この家の子供たちを、さらには大人たちをも不屈の精神と変らぬ愛とをもって見守ってきたし、階段の昇り降りにも不自由になった老いた今でも、時計が狂い、ストーヴが冷えきっているコンプソン家の崩壊をかりうじて食止めている当の人物だからである。そしてまた、ディルシーのその言葉はシェゴグ師の説教に影響されたということも考えられる。なぜならば、旧・新両約聖書の世界を潜り抜けて現われた「ヨハネの黙示録」の言葉（「わたしはアルパであり、オメガである。」：第1章8節、「わたしは初めであり、終りであり、また生きているものである」：同章17—18節、「わたしはアルパであり、オメガである。最初の者であり、最後の者である。初めであり、終りである」：第22章13節等）とその言葉は奇しくも重なりあっているからである。

ここで、『響きと怒り』について多くを言う余裕はないが、とにかく、ディルシーのその言葉は示唆的ではありながらも、あまりに唐突であるということを書いておきたい。しかしまた、ディルシーのその言葉は『八月の光』(*Light in August*, 1932)のリーナ・グローヴ(Lena Grove)を理解するための一つの鍵になっているようにも思える。その言葉はすべてを包み込むものだからである。

ぼくがディルシーのその言葉とリーナとを結びつけようとしているのは、エピグラフに掲げた“‘I have come from Alabama : a fur piece. All the way from Alabama a-walking. A fur piece’”⁽³⁾『わたしはアラバマから来たんだわ、長い距離を。アラバマからずっと歩きどおして、長い距離を。』』という言葉で『八月の光』は幕を上げ、“‘My, my. A body does get around. Here we

aint been coming from Alabama but two months, and now it's already Tennessee.'”(4) 『まあ、まあ。人間の体ってずいぶんと歩き回るものね。アラバマを出てたった2ヶ月にしかないというのに、もうテネシーにいるんだもの』という言葉で幕を下ろしているからである。付け加えれば、一章の終りに『八月の光』の世界を締め括っている言葉と呼応する（実際には一章の終りの言葉と『八月の光』の最後の言葉とが呼応していると言うべきだが）ように、“‘My, my,’ she says; ‘here I aint been on the road but four weeks, and now I am in Jefferson already. My, my. A body does get around.’”(5) 『まあ、まあ』と彼女は言う、『旅に出て4週間にしかないというのに、もうジェファソンにいるんだわ。まあ、まあ。人間の体ってずいぶんと歩き回るものね』というリーナの言葉があるからである。リーナは、しかし、直接にそして多くの場合は間接に、ジェファソンで起こる事件と関わりあうのだが、ディルシーとは違って、「わたしゃはじめとおわりばみただ」というようなことは言わない。彼女は時が至れば、ジェファソンへ向ってアラバマを出たのと同じように、また旅に出ているのである。その二つの、あるいは三つの言葉の間で『八月の光』の世界は展開されているのである。言い換えれば、リーナがあるいはリーナの世界がジェファソンで起こるすべての事件を包み込んでいるのである。したがって、リーナは自分の関わった事件についてディルシーのように「わたしゃはじめとおわりばみただ」という言葉を口にする必要はない。この限りにおいて、リーナはディルシーの言葉を血肉化した姿であると言ってよいのである。

そうであるならば、リーナ・グローヴとは一体どのような女性であろうか。ここでは、しかし、様々な問題を孕む『八月の光』にあって、そのリーナ像をのみ追っていきたい。

II

ぼくらが『八月の光』の世界に一步踏みこんだとき、まず目にするのは、路傍に腰を下ろして、坂道をゆっくり登ってくる四輪馬車を見やりながら、「『わたし

リーナ・グローヴ

はアラバマから来たんだわ、長い距離を。アラバマからずっと歩きどおしで。長い距離を』』と考えているリーナの姿である。もっと正確に言うならば、平坦な道の向こうの方からやってくるのではなく、坂道を登ってくる四輪馬車を見やっているのだから、少なくとも四輪馬車よりは一段高い所にいるリーナである。また、考えごとをしているのだから、一言も発せず黙って見下ろしているリーナである。ぼくらがまず目にするのは、一段高い所から眼下に広がる世界を黙って見下ろしている者の姿である。この構図はそのまま、リーナとジェファソンとの位置関係であると言ってもいいであろう。なぜならば、リーナはその翌日ジェファソンへの旅がまさに終わろうとするとき、もしくはジェファソンへまきに入っていくとすると、今まで登ってきた丘の上から谷間越しに向こうの岡のジェファソンの町から立ち上っている二条の煙を見ているからである。その煙の一つは燃えている石炭の濃い色をしている。それは工場の大煙突から出ている煙であり、いわば、ありふれた日常世界の煙である。もう一つは黄色の煙である。その煙をリーナを乗せてくれた四輪馬車の馭者は、“‘That’s a house burning’”⁽⁶⁾ 『「あれは家が燃えているんだ』』と言う。それは火事という事件の煙である。リーナはこうして丘の上からジェファソンの日常と事件とを見ている。したがって、冒頭の一節は、あるいは第一章は『八月の光』を包み込んでいると言える。そして、このことは、『八月の光』におけるリーナの位置を見事に物語っている。リーナはジェファソンの事件と直接に関わり合う必要のないことをも意味している。

リーナは20歳で、今すぐにも子供が生まれそうな大きなお腹をかかえ、生まれてくる子供の父親を探し出すために旅に出たのであった。今ミシシッピ州のジェファソンの近くに来ているリーナは「東」の方のアラバマ州からやって来たのであり、ジェファソンで出産を終えると、やがてはさらに「西」へと進んでテネシー州まで行くことになる。その旅はおそらくさらに西の方へと続けられていくことになるだろう。彼女がテネシーから来て、アラバマへ向うのではなく、アラバマから来て、テネシーへ向うということは、今も述べたように、彼女の旅が「東」から「西」への移動であることを意味している。そしてそれはリーナの旅

が太陽の運行と軌を一にしていることを意味する。

太陽の運行と軌を一にして、「東」から「西」へと旅を続けるリーナは何故身重になったのであろうか。また何故、生まれてくる子供の父親を探し出すために旅に出なければならなかったのであろうか。しかし、彼女のそれまでのことについては、出生の時から死の瞬間に至るまでの36年の生涯が描き出されているもう一人の主要な人物であるジョウ・クリスマス (Joe Christmas) の場合とは違って、多くは語られていない。したがって、リーナがどこで生まれたのか、またどのように生きてきたのかについて、ぼくら読者は多くを知ることはできない。それは、彼女が旅立った所がどこであり、何故旅立たなければならなかったかを明らかにすれば、それで十分であるということだからであるからかも知れない。そのなかで明らかにされるのは、リーナが旅立った所はジェファソンの「東」のアラバマ州のどこかであるということと、やがて生まれてくる子供の父親がルーカス・バーチ (Lucas Burch) であるということ、そしてそれに付随するいくつかのことだけである。

リーナはアラバマ州の名もない村 (地名さえ与えられていないのでそこは村とは呼べない所であったかも知れないが) に両親と住んでいた。12歳の夏に、先ず母が、次いで父が死んだ。リーナは孤児となったのである (クリスマスもまた孤児である)。母は死ぬとき、リーナに父の世話をするよう頼み、父もまた死ぬとき、彼女に兄の所へ行くよう言いつけた。リーナは両親の言いつけに従う。ここに周りのものを受け入れていくリーナの一端がうかがえる (クリスマスはすべてを拒否する)。それは後のリーナの言葉で言えば、“‘That’s just my luck’”⁽⁷⁾ 『それがほんとにわたしの運命なんだわ』ということになる。こうして、リーナはアラバマの名もない村を出ることになる。それは言ってよければリーナの旅の始まりである (クリスマスも長い旅、一生涯の旅をする)。

リーナは兄の所へ移った。ドーンズ・ミル (Doane’s Mill) という所である。そこは小さな村であった。その村は “the hamlet which at its best day had borne no name listed on Postoffice Department annals”⁽⁸⁾ 「その最盛期におい

てさえ郵政局の年鑑に名の記されていない村」とある程小さな村であった。その村の小さいことについてはさらに次のようになる，“little less-than-village like a forgotten bead from a broken string”⁽⁹⁾「切れた首飾りからぬけおちて忘れられた一つの玉のように、村というにはあまりにも小さな村」といった体である。わずか5家族ほどが住んでいるだけである。そんな村の兄の所で兄嫁に替って家の世話をしながら8年を過ごすことになる。彼女が兄嫁に替って家の世話をしなければならなかったのは、兄嫁がいつもお産の床についているか、でなければその回復期にあったからである。こうしてリーナは20歳になった。

20歳になったリーナは窓から外へ出て、「男」と会うようになる（クリスマスも初めて「女」と会いに行くときは窓から出て行った）。相手は“*There was no reason why his name should not have been Brown*”⁽¹⁰⁾「彼の名前がブラウンであってはならない理由はどこにもなかった」ような男であり、彼がどこから来ようが、どこへ行こうが、どこにいようが、誰も気にすることはしないような男であるルーカス・パーチ、別名をジョウ・ブラウン（Joe Brown）という男であった。そしてリーナは身籠ってしまう。やがて、彼女の体の変化は兄たちの知るところとなる。兄はリーナのことを“*whore*”⁽¹¹⁾「売春婦」と言う（クリスマスが最初に関係した女性は「売春婦」であった）。そして彼女に相手の男のことを問い質す。しかし、リーナは決して相手の男のことで口を割ることはなかった。パーチは6ヶ月前にいなくなっていたのである。そして、もう子供は生まれそうになっているのだが、必ず迎えをよこすと言っていたパーチは迎えをよこすこともなければ、帰ってくることもない。“*I reckon a family ought to all be together when a chap comes. Specially the first one. I reckon the Lord will see that*”⁽¹²⁾「『子供が生まれてくるときには、家族は皆一緒になければならぬと思います。とくに最初の子供のときには。神さまがそのように気をつけてくれると思います』」ということをおこなうリーナは、やがて生まれてくる子供の父親を求めて、最初の子供のときは家族皆が一緒におれるようにと、旅に出たのである。出なければならなかったのである。しかし、リーナはルーカス・パーチの居

所を知っているわけではなかった。

9ヶ月の大きなお腹となり、もはや待ってはおれなくなったリーナは、おそらく誰も彼女が真昼に堂々とドアから出ていっても文句を言わないであろうことはわかってはいたのだが、夜、こっそりと、しかも窓から抜け出したのである。夜に、しかもこっそりと窓から抜け出したリーナは、太陽が長い夜の底から東の空に昇って、大地を照らし出すのに似て、4週間後にはジェファソンに現われるのである。こうして旅に出たリーナはその居所さえわかっていないパーチを求めて、歩き続けることになる。しかも、言ってみれば、その当てのない旅に出るにあたって、彼女は10セント玉と5セント玉とでたったの35セントしか持っていなかったのである。そして、ジェファソンへ、ジェファソンへと、つまりは、西へ、西へと進んで来たのである。ところが、そのジェファソンというのは、旅の途中で出会った人たちがルーカス・パーチといったような名前の男がいると教えてくれた町であって、パーチがジェファソンにいるということについては何ら信憑性はなかった。実際、リーナがジェファソンに着いて出会ったのは、ルーカス・パーチ (Burch) ではなく、彼と名前のよく似たバイロン・バンチ (Byron Bunch) であった。だけれども、ルーカス・パーチがジェファソンにいなかったというのではない。ルーカス・パーチはジェファソンにいた。しかし、その男はもはやルーカス・パーチではなくなり、ジョウ・ブラウンと名乗っていたのである。

ここで、リーナのジェファソンまでの4週間の旅がどのようなものであったのかについて述べておきたい。

その旅は “a peaceful corridor paved with unflagging and tranquil faith and peopled with kind and nameless faces and voices”⁽¹³⁾ 「だれることのない平静な信念が敷きつめられ、親切で名もない顔や声で満たされた平和な廊下」であり (クリスマスは実際に孤児院の廊下に立っていることがあるが、そこは彼を除けば外には誰もいない物寂しい場となっている), “a long monotonous succession of peaceful and undeviating changes from day to dark and dark to day again”⁽¹⁴⁾ 「昼から夜へ、そしてまた夜から昼へと長く単調に続く平和で迷いのな

い移り変わり」であった（クリスマスの時間は秩序を失い、乱れに乱れている）。整然としていると言え、あまりにも整然としている時間の移り変わりである。

「平和で道をあやまらない変化」とはとりもなおさず太陽の運行に外ならない。リーナはその4週間の旅をまるで壺のなかをぐるぐると回っているかのように続けたのである。リーナの歩きっぷりは“swollen, slow, deliberate, unhurried, and tireless as augmenting afternoon itself”⁽¹⁵⁾「増大する午後そのもののように、膨張し、ゆっくりで、慎重に、急ぐこともなく、疲れを知らない」のであった（クリスマスは南から北へ、北から南へせわしなく歩く）。そのようなリーナであってみれば、彼女が旅の途中で擦れ違っていく人たちが、例えばその一人であるウィンターボトム（Winterbottom）が“‘I reckon she knows where she is going’”⁽¹⁶⁾「『あの娘は自分の行き先を知っているようだよ』」というように見てとったとしても何の不思議もない。

また、彼女の旅は「親切で名もない顔や声で満たされた平和な廊下」でもあったのであり、その「親切で名もない」人たちは時として彼女に親切な手を差し伸べ、馬車に乗せてやったりするのである。その馬車もまた、彼女の歩き振りに似て、もしくは太陽の運行に似て、あまりにものろく進む。リーナの乗せてもらう馬車は「旋律」（rhythm）を伴い、「道」（road）と、八月の「熱気」（heat）と、「ゆっくり進む午後」（slow afternoon）と溶け合い、大地と合体するかのようにして進んでいく。リーナは太陽を見て、食事の時間を知り（クリスマスは時計によって時間を確認する）、一缶15セントのいわしの缶詰めやチーズやクラッカーを食べる（クリスマスは一回の食事に15ドルあるいは20ドルもかけるが、まずい食事をする）。さらには、アラバマの名もない所にいたときは、田舎娘と思われたくはないがために、町の近くまで来るとわざわざ馬車を降り、靴をはいて歩いていたリーナは“When she felt the dust of the road beneath her feet she removed the shoes and carried them in her hand”⁽¹⁷⁾「彼女は足の下に道路の土を感じると、靴を脱ぎ、それを手に持った」とあるように、生まれてくる子供の父親を求めて旅に出てからは大きく変貌している。リーナは、太陽の運行に

リーナ・グローヴ

合わせて旅をしているばかりでなく、大地と一体化しているのでもある。このとき、リーナ・グローヴはその名前 (Grove=森) と相俟って、「母なる大地」⁽¹⁸⁾へと変容しているのである。あるいは「自然」⁽¹⁹⁾ そのものと化しているのである。

III

IIにおいて、ぼくは、リーナのジェファソンまでの旅を追うことによって、彼女が身重になって、何故旅に出なければならなかったかを辿ってみた。その作業を通して、リーナの旅を太陽の運行と関連づけ、あるいは「土」との関連において、彼女の『八月の光』において果す役割がジェファソンに目をやる「母なる大地」のそれであるとした。あるいは、「自然」のそれであるとした。

そして、ここでは「母なる大地」とは何であるのか、また「自然」とは何であるのかを解くために、別の角度からリーナを追ってみたい。

リーナは20歳の女性である。身籠っているから「成熟した女」である。町へ出たとき、田舎娘とは思われなくなかったがために、町近くで馬車を降り、わざわざ靴をはいて歩いた素朴な田舎娘でもあった。旅の途中で、アームスティッド (Armstid) の家で食事を御馳走になった折、自分が礼儀正しく食事をしたかどうか気にする娘でもある。周囲の人たちの親切は何でも受け入れていくのがリーナではあったが、アームスティッドの奥さんに彼女がそれまで苦勞して貯えてきた小銭を差し出されたときは素直に受け取り、受け取っただけならまだしも、その金で今度は買いたいものが買えると思うちゃっかりした娘でもある。素直に周囲の善意を受け入れる素朴さは、観点を変えれば、生きていくためのしたたかな強さということになる。もし、リーナがそのようにただ周囲の善意に頼っているだけの娘であれば、彼女の素朴さは変質してしまい、彼女を単なるしたたかな乞食娘に仕立てることになるだろう。しかし、彼女が受け入れるのは周囲の善意だけではない。彼女は自分の身に不都合なことが起こることであっても受け入れているのである。例えば、どこの馬の骨ともわからないルーカス・パーチの子供を身籠ったということがそのことを物語っている。そのために彼女は兄に「売春婦」

リーナ・グローヴ

呼ばわりされているのである。その限り、リーナにはしたたかな素朴さがあると言っている。

リーナが外の誰でもなく、ルーカス・パーチの子供をまず初めに身籠ったということは極めて示唆的である。なぜならば、ルーカス・パーチはジェファソンではジョーブ・ラウンと名乗っており、少なくとも名前の上では別人になりおおせている人物だからである。推測の域を出ないけれども、パイロンの計らいでリーナに会ったパーチは彼女に会うと、また他所へ逃げ出しているが、今度またリーナがジェファソンでと同じように彼と出会うことがあるとすれば、彼はおそらくパーチやブラウンではなく、もう一つ別の名前を名乗っていることだろう。あるいは、ドーンズ・ミルでリーナと会ったときのルーカス・パーチという名前も実は偽名であったということになるかも知れない。このように推測したのは、何もルーカス・パーチの名前が本当のところは何であるのかを詮索したかったからではない。他には、クリスマスに孤児院の玄関に棄てられていたというだけで、ジョセフ・クリスマス (Joseph Christmas) と名付けられたクリスマスがいるからであり、クリスマスは養子にやられたマッキューチャン家 (the McEacherns) でもマッキューチャンと名乗らされることを頑なに拒み、クリスマスであることを守り通しているからである。いずれにしても、『八月の光』のなかで二つの名前を持っているのはルーカス・パーチだけである。リーナの初めて身籠った子供がそのルーカス・パーチの子供であれば、リーナにとって身籠らせた男は特定の人物である必要はない。それは、相手の男が誰であってもいいということを意味する。「子供が生まれてくるときには、家族は皆一緒になければならないと思います。とくに最初の子供のときには。神さまがそのように気をつけてくれると思います」ということで、生まれてくる子供の父親を探しに当てもない旅に出たリーナは、実際に、パイロンの計らいで、パーチに再会する。ところが、リーナは、“with her sober eyes in which there was nothing at all—joy, surprise, reproach, love ——”⁽²⁰⁾ 「そのなかには何の表情——喜びや、驚きや、叱責や、愛の——もない冷静な眼で」、あるいは “with her grave, unwinking, unbearable gaze”⁽²¹⁾

リーナ・グローヴ

「重々しい、まばたき一つしない、耐え難い眼差で」パーチを眺めやるだけである。そして、パーチは逃げて行く。逃げていくパーチをリーナは止めもせず、逃げるにまかせておく。そして、彼女は“‘Now I got to get up again’”⁽²²⁾ 『『さて、また私は起き上がらなくちゃならないわ』』と言うだけである。リーナは、もう一度父親探しの旅に出なければならない。しかし、今度は生まれたばかりの、まだ名前のついていない赤ん坊とパイロン・パンチが一緒である。そして、「まあ、まあ。人間の体ってずいぶんと歩き回るものね。アラバマを出てたった2ヶ月にしかないというのに、もうテネシーにいるんだもの」ということになる。

このように、リーナを見てくると、彼女は兄が言ったように「売春婦」と同様な女であると言ってもいい（‘lena’にはラテン語で *bawol, procuress* = 「売春婦」という意味がある）。しかし、Ⅱにおいて指摘したことからも明らかであるように、リーナを単に「売春婦」として片付けるわけにはいかない。なぜならば、「母なる大地」とは、あるいは「自然」とはそういうものだからである。「母なる大地」は、あるいは「自然」はすべてを受け入れてはいくが、逆に働きかけてくることはない。「母なる大地」は、あるいは「自然」は「売春婦」のようにすべてを受け入れるのだ。リーナは、逆説めいた言い方をすれば、「売春婦」呼ばわりされることによって、「母なる大地」に、あるいは「自然」に変容するのである。付け加えれば、フォークナーの描く魅力的な女主人公たちは、多かれ少なかれ、リーナ的である。『死の床に横たわりて』(*As I Lay Dying*, 1930) のアディー・バンドレン (Addie Bundren) は夫以外の男の子供を産んだのだし、『村』(*The Hamlet*, 1940) のユーラ・ヴァーナー (Eura Varner) もまたそうである。『尼僧への鎮魂歌』(*Requiem far a Nun*, 1951) のナンシー・マニゴー (Nancy Mannigoe) は正真正銘の「売春婦」であった。Ⅰで少し触れた『響きと怒り』のキャディーもまた奔放な性に生きたのであった。

「母なる大地」は、あるいは「自然」はすべてを受け入れて、すべてをその内部に溶かし込んでいく。受け入れ、溶かし込んでいくだけのしたたかさがあり、強さがあり、受容力がある。「母なる大地」の、あるいは「自然」の計り知れな

リーナ・グローヴ

い受容力を前にしては、人間は、あるいは男たちは、ルーカス・パーチのように逃げ出すか、あるいはパイロン・パンチのように付き従うかしかない。『八月の光』について、フォークナーは例えば次のように語っている。

that story began with Lena Grove, the idea of the young girl with nothing, pregnant, determined to find her sweetheart. It was — that was out of my admiration for women, for the courage and endurance of women. As I told that story I had to get more and more into it, but that mainly the story of Lena Grove.⁽²³⁾

その物語はリーナ・グローヴ、つまり身重になって、恋人を探し出そうと決心した何も持たない若い女という考えで始まった。その物語は女への、女の持つ勇気と忍耐への私の賞讃から起こった。私はその物語を書き進めていくうちに、さらにさらに多くのものを書き加えなければならなかったが、それは主としてリーナ・グローヴの物語です。

註

1. William Faulkner, *The Sound and the Fury*, p. 371.
2. *Ibid.*, p. 375.
3. William Faulkner, *Light in August*, p. 1.
4. *Ibid.*, p. 480.
5. *Ibid.*, p. 26.
6. *Loc. cit.*
7. *Ibid.*, p. 3.
8. *Loc. cit.*
9. *Loc. cit.*
10. *Ibid.*, p. 33.
11. *Ibid.*, p. 4.
12. *Ibid.*, p. 18.
13. *Ibid.*, p. 4.
14. *Ibid.*, p. 5.

15. *Ibid.*, p. 7.
16. *Loc. cit.*
17. *Ibid.*, p. 4.
18. Michael Millgate. *The Achievement of William Faulkner*, p. 133.
19. Cleanth Brooks, *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*, p. 67.
20. William Faulkner, *Light in August*, p. 406.
21. *Loc. cit.*
22. *Ibid.*, p. 410.
23. Frederick L. Gwynn & Joseph L. Blotner (eds.), *Faulkner in the University*, p. 74.

テキスト

Faulkner, William, *Light in August*. New York: Random House, 1959.

参考書

- Brooks, Cleanth, *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. New Haven: Yale Univ. Press, 1966.
- Millgate, Michael, *The Achievement of William Faulkner*. New York: Random House, 1966.
- Gwynn, F. L. & Blotner, J. L. (eds.), *Faulkner in the University*. New York: Random House, 1965.